



追悼 森正子さんを偲んで

新井 靖子

森正子さんの訃報が11月半ばに届いた。以前から体調が思わしくないとの連絡はいただいていたが、お見舞いもできず告別式にも伺えないままのお別れとなったことはやはり辛くさびしい。

思い返せば、正子さんが執筆された本「はぐくむ 自閉症の世界をひらく母と子の記録 幼児期編」がぶどう社から出版されて以来、長いお付き合いをさせていただいた。埼玉県熊谷からわになろう会のために講演に来てくださったこともある。

また、1990年に障がい者の働く施設「はぐくみ園」を開設され園長になられたときには、先生仲間やお母さんたちと一緒に真新しい園を見学に出かけた。埼玉県大里郡寄居町末野の自然豊かな山中にあるその園は、川崎市内の同様の施設とは内容がかなり違っていた。あまり記憶が定かではないが、地の利を活かした炭焼き、木工、農耕、養鶏、製茶やお菓子作りなど多様な生産活動がおこなわれていた。

「はぐくむ」に成長の記録が書かれている息子さんも農業大学校を卒業され準指導員という位置づけでそこでお仕事をされていた。

森さんご夫妻のご尽力で生まれた社会福祉法人はぐくみ会は、地域のニーズに応じて着実に事業を拡大され、介護老人保健施設逍遙の郷、生活サポート事業、第二はぐくみ園分場、地域福祉相談センターなどをつぎつぎと開設。近年ではデイサービス事業や医療型短期入所事業なども始められている。

寄居町だけでなく、熊谷市、深谷市一帯の障がい者・高齢者の福祉を担う大きな法人として歩み続け、現在は三女の根岸瑞栄さんが理事長を継いで運営にあたられているようだ。

さて、わになろう会と正子さんの関わりについてのその後を振り返ると、「はぐくむ② 小学校編」を出版された時には「はぐくむ①」と同様に川崎の皆さんにも会報を通じて紹介し、購読をお勧めした。引き続き折に触れてお世話になることもあったが、2014年6月から3年あまり会報わになろうに寄稿していただいた。『息子が社会に出る』というタイトルで、2017年12月まで38回にわたって、はぐくみ園から巣立って地域で就労されてからのさまざま

なエピソードが紹介されている。寄稿に際しては正子さん自筆の原稿を長女の村田明日森さんが会報の紙面に入れやすいようにパソコンに打ち込み、毎回メールで送ってくださった。この連載には、三人の娘さんたちがそれぞれに独立され、仕事の上でも良きパートナーだったご主人が亡くなられた後の息子さんとの二人暮らしの様子、働く社会人としての息子さんの日々、休日の楽しみやお母様への労りなどが綴られている。会報読者の皆さんにはたいへん好評だったので、まだまだ続くつもりで、最終回となった「その38」は【次号をお楽しみに】で締めくくっているが、未完のままで残念でならない。

改めて訃報のことに立ち返る。驚いたことに葬儀社からFAXでお知らせが届き、お香典の代行をしていただけるとのこと。早速、告別式に間に合うように銀行振込でお願いしておいた。

数日して、返礼の品とともに心温まるご挨拶状二通が送られてきた。一枚は喪主を務められた息子さん自筆で、もう一枚はご家族一同から。思わず涙したそのご挨拶のほんの一部を転記させていただく。

僕が学生時代までは高校の教師をやってその後僕と一緒に「はぐくみ園」で園長をやっていました。とても頑固で僕が何かやろうとすると他のことをさせまくっていました。いつもおいしいご飯をつくってくれてありがとうございました。僕を54年間育ててくれてありがとうございました。

(喪主 ご長男より)

何事にも真剣に取り組み、熱心で探究心があり努力を惜みず、どんな困難にも正面から向き合う人でした。その姿を希望や憧れの対象として、自然と多くの人が集まっていたことが忘れられません。誰にでも分け隔てなく優しく、あたたかく包容力があり、慈愛に満ちた太陽のような人でした。

障がい者施設がまだ未成熟であった頃に、障がいのある息子のために、多くの活動をしました。

(ご家族一同より)

すばらしい人生に賛辞と哀悼の念^{おも}いを贈ります。